

論文概要書

## 中原中也研究

——詩壇との関わりからみた作品の生成——

加藤 邦彦

## 序 中原本全集の変遷、および一九三〇年代の近代詩の動向

### ——本研究の構想とねらい——

序では、本研究の構想およびねらいについて述べる。中原本也研究は、これまで計四回刊行された中原本全集と深い関わりを持つている。なかでも特に本研究と深い関わりを持つているのが、『新編中原本全集』全五巻・別巻上下（角川書店、二〇〇〇年二月—二〇〇四年二月）だ。その編集作業のなかから構想された本研究では、主に次の三点をねらいとしている。（一）新たな「基礎資料」の探求によって、これまで築かれてきた中原本也像を更新すること。より確かな中原本也像を形成するために、実証的な観点から中原本也およびその詩について考えること。（二）同時代との関わりのなかから中原本也およびその作品について検討すること。（三）作品の生成過程の探究を通じて、詩に対する中原本の意識に迫ること。また、右のことをねらいとして中原本也およびその作品について考えていく際、中原本が主に活動した一九三〇年代の詩に関する知識が必要不可欠となる。そこで、当時の詩をめぐる文学的状况について、そのころ出版されていた詩雑誌を中心に概観する。あわせて、本論文の構成についても概説する。

## 第一部 中原本也と音楽

### ——詩人像の形成を視野に入れつつ——

第一部では、今日的な中原本也像が形成されるまでの過程を視野に入れつつ、中原本の詩における音楽性の問題、および音楽そのものと中原本の関わりについて考察する。まず、自分の詩を示す際に中原本自身が用いている「歌」という言葉についての検討を試みる。次に、近年、中原本と音楽の関係が注目されていることを受けて、近代日本における音楽の受容をたどりながら、中原本の詩に登場する作曲家たちや音楽関連用語について考える。さらに、ラジオ放送された中原本の作品を概観しながら、中原本は「声」の詩人であるという今日的なイメージがどのような言説に支えられているかを分析する。

### 第一章 「歌」の内実——中原本也と音楽に関する一つの視角——

現在にいたるまでの中原本也像の形成に決定的な役割を果たしているのが、小林秀雄の詩人観である。小林は中原本を「詩の音楽性にも造型性にも無関心であつた」と評した。しかし、未発表詩篇「雪が降つてゐる……」の推敲過程をみると、必ずしもそうとはいえない。小林は中原本の詩に言及する際、「歌」という言葉を「告白」という意味で比喩的に用いているが、同様のことは中原本自身についてもいえる。中原本は、自分の感情を直接的に表出することを詩の第一義とし、そのような詩を比喩的に「歌」と呼んだ。そのことがうかがわれるのが、一九二七ごろに計画されていた第一詩集のための詩稿だ。中原本の詩が「歌」であり、「音楽」的だというとき、わたしたちは非常に曖昧な概念としてこれらの語を用いている。しかし、その曖昧な「音楽」こそ、近代詩を考える際の重要なキーワードであるだろう。マチネ・ポエティク同人たちの発言を参照すると、定型律やオノマト

ぺなど聴覚イメージを喚起する「音楽」的な要素が、中原の詩が「歌」であるという今日的な神話を背後から支えている様子が浮かび上がってくる。

## 第二章 詩と音楽——中原中也と洋楽の関わりをめぐって——

中原中也と洋楽との関わりを意識して中原の詩を眺めた場合、そこに西洋の作曲家たちがしばしば顔を出すことに気づく。洋楽はラジオとレコードを媒介として、大正末期から昭和初期にかけて一般に広く普及した。中原の詩に西洋の音楽家たちがあらわれるのは、そうした時代性の反映である。また、兼常清佐「音楽芸術の階級制」を参照すると、そのような時代性の影はバッハやモーツァルトを「倦果てた」とする「いのちの声」の歌い手の感性にもみることができよう。さらに、兼常の論を参考にすると、「いのちの声」や「憔悴」で志向される「空の歌」とは、兼常のいう「或る種の民謡」に相当するのではないかと考えられる。そのことから浮かび上がってくるのは、中原における大正期童謡運動や北原白秋の影響だ。

## 第三章 歌曲・朗読・ラジオ放送——中原中也像の形成に即して——

中原中也の数少ない詩人の友人である草野心平は、中原中也像の形成に大きく関与している。草野はことあるごとに中原の朗読について語った。その発言が「歷程」同人たちの言説と相俟って、中原は「声の詩人」である、という今日的な神話の形成を促したといえる。草野は中原の「夏」をラジオ番組で朗読したが、中原の作品はそれ以前にも、「春と赤ン坊」と「妹よ」が歌曲としてラジオ放送されたことがある。その放送の際、各紙のラジオ欄にそれらの歌詞が掲載されていたことが『新編中原中也全集』の編集過程で判明した。それらに作曲したのは、音楽集団「スルヤ」の中心人物、諸井三郎。中原にとつての「スルヤ」の重要性は、中原の交友関係や同時代の言説にあらわれている。また、「スルヤ」の発表演奏会で披露された中原作詞の歌曲のひとつに、内海誓一郎作曲の「帰郷」がある。その歌詞と『山羊の歌』所収の本文や「四季」掲載のヴァリアントとの異同には、「帰郷」の本文を決めかねていた中原の姿が示されているだろう。

## 第二部 中原中也への影響

### ——愛唱をめぐって——

第二部では、中原の接した日本近代詩がどのようなかたちで中原の内部で消化され、その詩の言葉となっていたかということについて、特に愛唱という観点から検討する。まず、中原が一九二七ごろ高く評価していた佐藤春夫を引き合いに出し、中原との比較を行う。続いて、その系譜の前に位置する詩人北原白秋を取り上げ、中原における白秋の影響について探る。さらに、生前の親交こそなかったものの、やはり中原が高く評価していた宮沢賢治を持ち出し、両者のテクストを比較する。

## 第一章 愛唱歌の系譜——佐藤春夫と中原中也——

初期の中原中也は佐藤春夫に共感を示していた。民衆詩派の全盛期に出版されたのが春

夫の第一詩集『殉情詩集』である。古典的な風体のこの詩集が世間から熱烈に歓迎されたのは、民衆詩派が築き上げた詩壇の流行のなか、当時の詩人たちが忘却していた伝統的な詩情をこの詩集が独占したためであろう。『殉情詩集』は「古典的」「言語の感覚それ自体が古臭い」などと評されたが、中原の詩もまた同時代においてしばしば「古風」「古典的」と評された。また、そのような中原の作品は春夫の詩と同様、当時の読者たちに一種の安心感のようなものを与えた。中原の作品およびその詩観が大正期における佐藤春夫のそれとパラレルな関係になることは、初期の中原における春夫への共感の度合いがそれほどまでに強いものだったことを示していると思われる。

## 第二章 ホテルの屋根に降る雪は——北原白秋と中原中也——

中原中也「雪の宵」には、北原白秋「青いソフトに」がエピソードとして引用されている。にもかかわらず、中原と白秋の関係について、これまで議論らしい議論がなされてこなかった。そこには、中原をよく知る大岡昇平の言説が深く関与していると思われる。白秋は自他ともに認める童謡詩人だったが、中原の詩もまた同時代においてしばしば「童謡的」と評された。その詩のなかでもっとも童謡風の作品とみなされるのが、「六月の雨」である。この作品は、白秋の「雨」といくつかの点で類似している。一方、決定的に異なっているのが作品に対する子どもの関わり方だ。ところが、中原の詩論を概観してみると、子どもについての両者の考え方の接点をわたしたちは発見するだろう。また、ふたりの詩論を比較すると、中原が白秋とも通じる概念をフランス詩の学習によって手に入れていることがわかる。そのことを踏まえた上で中原と白秋の関係を捉え直した場合、中原の詩の分析には新たな展開が生じるに違いない。その一例として「湖上」について指摘する。

## 第三章 「書く」行為の背後にあるもの——宮沢賢治と中原中也——

宮沢賢治の「書く」行為の特異さは、『校本宮沢賢治全集』の登場によって多くの人に知られることとなった。しかし、落書きや抹消された語句、時には消しゴムによる抹消稿さえ活字化してしまう校本全集が、賢治を考える上では常に「過渡的形態」における推敲が問題となり、その時々々の「完成」がしばしば無視される、という傾向を招いてしまった感はある。賢治が自分の作品を何度も改稿した理由は、その時々々の「完成」の背後に流れている音声に耳を傾けたとき、初めてみえてくるだろう。また、賢治が最晩年を「文語詩」の清書に費やしたことに、賢治と同じように作品の改稿を繰り返した同時代の詩人、中原中也を重ね合わせてみると、そこからは「伝統」のない近代詩の作者としての心情が浮かび上がってくると思われる。中原は賢治の詩を「民謡でさへある殉情詩」と評した。その評価には、中原が賢治の詩に音数律への志向性を感じ取っていたことがうかがわれる。その音数律への志向性が、中原に賢治の詩を声に出して読むことを促したのではないだろうか。

## 第三部 中原中也と雑誌の関わり（一）

### ——詩篇の再掲を中心に——

第三部では、中原が同じ詩篇を何度も雑誌発表していたことを中心に、中原と諸雑誌との関わりについて検討する。最初に、「朝の歌」が制作された一九二六年ごろから、みずからが編集した同人誌「白痴群」が創刊される一九二九年ごろまでの中原の意識について概観する。引き続き、一九三三年に創刊された季刊「四季」への中原の寄稿の意味と、その前後の中原の状況について考察する。また、『山羊の歌』収録以前に計三回雑誌発表された中原の初期代表作のひとつ、「サーカス」についての分析を行う。

## 第一章 中原中也、その文学的出発——「朝の歌」から「白痴群」創刊前後まで——

「朝の歌」を制作したころの中原中也は、友人たちに詩をみせることを優先し、不特定多数の前にみずからの作品を晒そうとはしなかった。その詩が不特定多数に示されるのは、同人誌「白痴群」の創刊を待たなければならない。だが、「白痴群」に発表された詩篇をみてみると、同誌創刊後も中原は不特定多数の読者というより、特定の誰かに詩をみせることを優先していたのではないかと考えられる。また、中原は「朝の歌」を制作したことによって、手数をそれほどかけなくても詩は成り立つ、という樂觀的な意識をあらためた。しかし、自分の作品が文学的に認められるという点については、やはりその後も樂觀的に構えていた節がある。そのころの中原に欠けていたのは、文壇や詩壇に進出しようとする意志や努力であり、さらには当時の文学状況に対する同時代的な感覚だったということができる。

## 第二章 中原中也・一九三三年——季刊「四季」への寄稿を中心に——

一九三三七月発行の季刊「四季」第二冊に、中原中也の詩「少年時」「帰郷」「逝く夏の歌」が掲載された。同誌への中原の寄稿を堀辰雄に仲介したのは小林秀雄である。中原と小林の関係は、この仲介をきっかけとして、それまでとは異なる段階へ進んだということができよう。同誌への寄稿は、中原に「雌伏」時代の終焉をもたらしてくれたのみならず、詩壇に彼の存在を示すまたとない機会となった。中原の詩が当時の読者たちにどのように迎えられたかという点では、三篇の詩が同時掲載されていることが重要である。この三篇は、内容的なつながりを持っていると考えられる。また、そのうちのひとつである「帰郷」は、初出誌「スルヤ」以前に成立した初稿のかたちに本文が戻されている。そのことは、季刊「四季」が中原が初めて寄稿した「詩文誌」であることと関係があるのではないだろうか。

## 第三章 ゆらゆれる「ゆあーん ゆよーん」——中原中也「サーカス」の改稿と行の字下げをめぐって——

中原中也「サーカス」を考えるにあたって、行の字下げ、およびそれが形成する視覚的なリズムは決して無視することができない。それは、行の字下げがこの詩の中心的なイメージに関連していると思われるからだ。ところがこの行の字下げは、「サーカス」が計三回雑誌発表されるなかで大きく改変されている。なかでも特に大きく異なっているのが「短歌と方法」掲載の本文である。ほかの本文と比較すると、この「短歌と方法」掲載の本文は初稿にあたるものだったと考えられる。また、おそらく中原は行の字下げという詩の技法を、手書きの世界から活字の世界への移行のなかで発見したのだろう。とすれば、

行の字下げは文字が活字化される過程で失われてしまう「書く」行為の身体性にも変わるものとして考えられたのではないだろうか。

#### 第四部 中原中也と雑誌の関わり (二)

##### ——第二次「四季」との関係について——

第四部では、一九三四年一〇月創刊の第二次「四季」と中原の関わりについて考察する。まず、中原がいったん創刊号に送った原稿の差し替えを行ったという事実をもとに、第二次「四季」と関わり始めたころの中原の意識を探る。次に、「四季」発表作品に『在りし日の歌』非収録のものが意外と多いことから、その理由について考えるときともに、そのなかのひとつである「詩人は辛い」について考察を行う。さらに、創刊後の第二次「四季」の展開をたどりながら、中原が同誌にもたらしたものについて検討する。

#### 第一章 第二次「四季」創刊前後の中原中也

一九三四年一〇月、第二次「四季」が創刊された。中原中也は、創刊号のためにいったん詩稿を送ったのち、以前発表したことのある作品をうっかり送ってしまったという理由で、その詩を「みちこ」に差し替えている。しかし実は「みちこ」もまた以前に雑誌発表したことのある詩篇だった。「みちこ」の初出が一九三〇年発行の「白痴群」第五号であることを踏まえて中原の詩の雑誌発表を概観してみると、中原は「スルヤ」「生活者」「白痴群」にかつて発表したことのある詩を選んで再発表を行っていたのではないかと考えられる。また、中原は一度再発表した作品をあらためて再発表することのないよう一応は配慮していたのだろう。ただし、中原はそのルールを厳密に守っていたわけではない。興味深いことに、そうした中原の態度を批判するかなような丸山薫の文章が、第二次「四季」創刊号に掲載されている。

#### 第二章 『在りし日の歌』非収録の「四季」発表詩篇からみえてくるもの

第二次「四季」が創刊されて以降、中原中也は毎号のように同誌に作品を発表した。同誌への作品発表を概観してみると、『在りし日の歌』に収録されていない作品が意外と多いことに驚かされる。中原が同時期に作品発表していた雑誌に「文学界」と「歷程」があるが、三誌を比較すると、完成度が高いとは必ずしもいえないような作品、みずからのこれまでの作品傾向と違うような作品を中原は「四季」に発表していたのではないかと考えられる。一方、『山羊の歌』にも『在りし日の歌』にも収録されていない「四季」発表作品のなかには、詩集非収録であることが惜しまれるような作品もいくつかある。そのうちのひとつが「倦怠」だ。また、同じく詩集非収録の「詩人は辛い」は、「四季」に依拠する詩人仲間に向けたエールとして読むことができると同時に、この作品を読んでいる詩人たちに対する皮肉としてもみることができよう。

#### 第三章 第二次「四季」にとって中原中也の存在意義とは何だったか

第二次「四季」は、もともと雑誌としての明確な主義主張を持っていなかった。そうし

た性格が変化し始めるのが、一九三六年の同人改編の辺りである。そのころの「四季」の詩を、山岸外史は「人生苦をもつてゐないかのやうにさへ見え」と評した。一方、そのイメージの対極に位置しているのが「歷程」同人たちの作品である。どちらかといえば、中原の詩は「四季派」よりも「歷程派」に属している。しかし、「歷程」の特徴に通じるような作品を、中原は「四季」にも発表していた。そこには、第二次「四季」における中原の異質さが示されているだろう。第二次「四季」において中原は異質な存在だった。その異質さゆえに、中原の詩は「四季」同人たちからしばしば批判された。もしあるとすれば、そこにこそ第二次「四季」にとつての中原中也の存在意義をみることができのではないだろうか。

## 第五部 晩年の中原中也

### ——新発見資料をもとに——

第五部では、中原の詩が雑誌掲載されることの多くなった一九三六年後半ごろから、病に倒れる一九三七年一〇月辺りまでの中原の動きについて、新発見資料をもとに探究する。最初に、一九九九年に発見された中村古峡療養所入院中の中原の日誌、「療養日誌」の記述内容とその意味するところを、中原の意識に即して考察する。次に、使用時期の一部が「療養日誌」と重なっている中原のノート「千葉寺雑誌」の記述内容を読解しながら、中村古峡療養所入院中の中原の心の動きについて分析を試みる。さらに、一九三五年前後の詩の状況を概観しながら、「詩壇」に対する中原の意識について検討する。

## 第一章 「療養日誌」をどう読むか

一九三七年一月、中原中也は中村古峡療養所に入院した。その入院中に書かれていたのが、一九九九年に発見された「療養日誌」である。その記述のなかにみられるいくつかの用語を、中原は中村古峡『神経衰弱はどうすれば全治するか』から学んだ。また、三〇日の日誌中に「丘の上サあがつて、丘の上サあがつて」という俚謡が記されているが、この俚謡が突如として中原に舞い降りたのは、中村古峡『神経衰弱と強迫観念の全治者体験録』の読書が何らかのきっかけになったのではないかと思われる。

## 第二章 「千葉寺雑記」をどう読むか

「千葉寺雑記」は、中原中也が一九三七年の中村古峡療養所入院中に使っていたノートである。ノートの記述によれば、母が自分を「子供扱ひ」した結果が今回の入院につながった、と中原は考えていた。そこで中原は、療養所院長の中村古峡の前で、入院以来一度も療養所を訪れていない母と話し合いを持ち、一刻も早く退院の許可を得ようと試みるが、その願いは古峡に却下される。そのころ書かれた詩篇には、母や小林秀雄に対する怨恨が綴られており、詩の世界がかなり歪んでしまっている。しかしながら、自分のつらさを詩のなかに吐き出すことで、中原はみずからの心の快復を図ろうとしている、とも考えられよう。

### 第三章 中原中也の「詩壇」意識——一九三五年前後の詩をめぐる状況と「日本詩人会」「詩人クラブ」「東京詩人クラブ」

中原中也は、彼が詩を書いていた当時の詩壇から孤立していた、というイメージが今日では強い。こうした詩人像は、詩壇に関心の低い文壇に属する中原の友人たちによって生み出されたものであるといえよう。しかし、生前の中原は明らかに同時代の詩壇を意識していた。とすれば、わたしたちは一九三五年前後の詩を取り囲む状況のなから、中原と詩壇との関わりについて考え直してみなくてはならない。一九三五年前後、詩人たちは同じ肩書きを持つ者同士が寄り集う場所を切実に求めていた。そうしたなかで創設されたのが「詩人クラブ」「東京詩人クラブ」というふたつの詩人サークルである。中原がこのふたつのサークルに会員として加わっていたことは、これまでまったく知られていなかった。ここには、詩壇に積極的に関与していこうとする中原の態度をみることができるのではないだろうか。

### 第六部 中原中也研究のこれから

#### ——今後の課題——

第六部では、本研究、さらには中原中也研究全体の今後の課題についての指摘を行う。まず、本研究の構想と深い関わりを持つ『新編中原中也全集』の特色を、制作時期の推定という観点から述べる。また、中原の二冊の詩集『山羊の歌』『在りし日の歌』がそれぞれ独立したものととして論じられることの少ないことを受けて、両者の特徴について再検討する。

### 第一章 「在りし日の歌」という詩集名はいつ付けられたのか——『新編中原中也全集』と制作時期推定の関係に触れつつ——

個人全集の役割のひとつに、各作品の制作時期を推定することがあるだろう。『新編中原中也全集』でもやはり、生前未発表作品についてはそれぞれの制作時期を推定し、それに従って作品を配列した。しかし、制作時期を含め、全集とはあくまで現時点で判明している限りのあらゆる可能性を視野に入れた「推定」に過ぎず、ひとつの仮説でしかないことに注意すべきだろう。したがって、これまでの考えを覆す新たな根拠が発見されれば、現時点での判断はその都度検証し直されなければならない。その一例として、未発表評論「（無題）（近頃佐藤信衛氏や）」の制作時期、および中原の第二詩集『在りし日の歌』の編集時期について検討する。

### 第二章 倦怠と幻想——中原中也『山羊の歌』『在りし日の歌』の再検討——

これまでの中原中也研究では、詩人としての存在全体を読み解くために、『山羊の歌』と『在りし日の歌』を区別せずに論じる傾向があった。しかし、中原の愛好者同士が相手に向ける『山羊の歌』派か『在りし日の歌』派かという問いが示しているように、両者の間には何らかの隔たりがある。そのことについて考えたとき、『山羊の歌』の特徴として



詩のなかに倦怠感が繰り返され、歌われていること、『在りし日の歌』の特徴として歌い手が過去や未来に幻想をみていることが挙げられよう。とすれば、そこにこそ両者の違いがあるのではないか。